さとうつぼのアリクイ

文・鳥谷灯子
絵・山田友貴

けんたの家の台所には、さとうを入れておくつぼがある。つやつやしたせとものので、ずしりと重い。いつもぴったりとふたがしてあって、とだなにおさまっている。そのふたをこっそりあけて、中のさとうを指ですくってなめるのがけんたは好きだった。

今日もお母さんがせんたくものを干しているあいだに、さとうをなめようとしたときのことだ。

「ぼっちゃん、そのつぼのふたを開けてくれませんかね？」

とだなの奥からとつぜん声がした。出てきたのは、細長ーい

顔をした、黒っぽい、細長い体の生き物だった。
「うわあ、なあに？」
けんたはたずねた。
「あたしはアリクイ。アリの巣をほって食べていたら、このさとうつぼに落っこちたんです」
けんたは信じられなかった。だって図鑑でみたアリクイはイヌより大きいのに、目の前にいるアリクイは手のひらに乗るほど小さい。それにアリの巣からさとうつぼに落ちるなんてことがあるだろうか？
「ほんとうです。今朝このつぼが開いたときに外に出たんですが、それから帰れなくて困っているんです」

今朝つぼが開いたときといえば、お父さんがコーヒーにさとうを入れたときだろう。
「それからずっとかくれていたの？」
けんたはアリクイがかわいそうになった。
「よくわからないけど、ふたを開ければいいんだね？」
「そうです。ぼっちゃん、おねがいします」
けんたはふたを開けた。
「ああ、ありがたい、ありがたい。ぼっちゃん、どうもありがとう」
アリクイはそう言うと、器用につぼの口に登って、その中に消えた。

けんたは急いでとだなからさとうつぼを取り出して、中をのぞいてみた。白いさとうが入っているだけでアリクイのすがたはない。持ち上げて底を下からのぞいてみたが、穴もなにも空いていない。

「おかしいな」

テーブルにつぼをおいて、スプーンでさとうを掘ってみた。すぐに底につきあたって、せとものがのぞいた。その表面でなにかが動いたような気がしてもっとよく見ようとしたときだった。

ぱさり、とまわりのさとうがくずれた。と思ったら、それはかわいた土だった。ぱらぱらと土が肩に落ち、いつの間にか、けんたは土の上にいた。あたりは草原だった。

足もとには、大きなアリがいた。けんたのにぎりこぶしぐらいもある大きなアリだ。

「うわあ！！」

おどろいてとびのくと、柱のようなものに背中がぶつかっ

た。ふりむいて見上げると、けんたの背よりも高い茎の上にタンポポのような花が咲いている。どうやら、さとうつぼのかげにいたアリクイのように、今度はけんたがちぢんでしまったらしい。

でも、低い位置から見上げるけしきは新鮮だ。けんたは元気よく歩きだした。

「やあ、ごきげんだね！」

高い木のこずえから小鳥（といってもけんたの半分ぐらいの大きさ）が羽をふる。けんたも手をふり返した。

そのうちに日がくれてきた。ところでいったいここはどこなのだろう？　少なくとも、うちの近所ではなさそうだ。どう

やって帰ればいいのだろう？

「おかあさーん！！」

けんたはお母さんを呼んで歩いた。そのときだ。くれかかった地平線から音を立てて黒っぽい大きな生き物が走ってきた。

「その声は、ぼっちゃんですな？」

びっくりしたけんたに、その大きな生き物は言った。細長い顔をしている。

「アリクイ！？」

「ぼっちゃんには、助けてもらったご恩があります。お困りのご様子のようだ、なんでもあたしに言ってくださいな」

「家に帰りたいんだよう」

「それなら例のアリの巣を探せばよろしいんで。さあ、せなかに乗った、乗った」

アリクイは器用に鼻でけんたをくるりと持ち上げると、せなかに乗せた。そして夕ぐれの草原をのっしのっしと歩いた。

しばらく歩いてタンポポの花のよこにけんたを降ろした。

「ほら、ここですぜ」

「ありがとう！　アリクイ、またね！」

けんたはアリの巣に足をふみ入れた。足のまわりでかわいた土がくずれた。と思ったらそれは白いさとうだった。さとうつぼの中で、ほりおこしたさとうがくずれたのだ。

外ではお母さんがまだせんたくものを干していた。

（おわり）

さとうつぼのアリクイ
2010 年 7 月 10 日　公開

文・鳥谷灯子　絵・山田友貴
製作・発行　宵星書房
http://eveningstar.sakura.ne.jp/
(c)Toya Touko,Yamada Yuuki　2010